

『「シェア」の思想／ または愛と制度と空間の関係』

門脇耕三ほか著

LIXIL出版（定価2,600円+税、B5判、360頁、2015.7）

ワークシェアリング、カーシェアリングなど、〈シェア〉が、現代社会の閉塞感を打ち破ることに期待を集めている。本書は、建築家らによる〈シェア〉の模索であり、シェアオフィスやシェアハウスなど、主に空間や場のシェアが念頭にある。

若者たちの最近のシェアは、気の合う仲間と親密なコミュニティを好んで形成する。一人暮らしより寂しくなく割安なら一石二鳥と考え、気楽に住まいをシェアする。稚拙なコミュニティ幻想でしかないという冷やかな見方も少なくない。とくに、生き延びるためにシェアせざるを得ない時代を経験した世代は、若者のシェア行動を理解しようとしにくい。

しかし、本書を読むと、若者のシェアはそれほど浅薄なものではないことにはっと気づかされる。東京では5人で一軒家をシェアし、熊野の水害に遭った家を直してフルサトをつくっているphaの暮らし方は、シェアの凄みさえ感じさせる。

本書を中心になってまとめている門脇によると、〈シェア〉は、「素朴な性善説的ユートピアを描く手段」ではなく「むしろ所属する共同体の『外』にある存在へと意識を呼び覚ますもの」だと言う。

シェアによって形成される共同体には2つの型があるという。閉鎖的シェア・コミュニティと開放的シェア・コミュニティである。前者は同質性が支配し、共同体の内と外で断絶があるのに対して、後者は異質性のまとまりであり、共同体の内と外に連続性がある。三浦展が〈共同体〉と〈共異体〉と呼んでいるものと符合す

る。ハーヴェイの、〈排他的コモンズ〉と〈都市コモンズ〉ともいえる。

とくに、ストックを活用して環境改善しようとするシェアは、後者の、他者を招き入れ、外に開かれたコミュニティへの関心が強いという。なぜか。

冒頭の序「〈シェア〉による近代の超克」で、用途別にゾーニングされ効率的であるはずの近代的な都市が機能不全を起こしていることを指摘した上で、門脇は、〈シェア〉を「より有機的な機能複合体への再組織化を促進させる触媒のようなもの」と位置づけている。

要するに、本書の中に断片的に登場する門脇の主張をつなぎ合わせると、「近代システムが支配している空間では、異質な他者と出会える機会を奪われているが、人口減少下で生じてしまった余剰ストックには異質性の入り込む隙がある」というわけだろう。空き地や空き家を創造的に活かす実践を通して、彼らは深淵なシェアの方向性を確実に見出しつつある。

門脇は編集協力という立場で、執筆者15人の名が羅列されているが、門脇による冒頭の序と最後の論考を総合して読むと、おおよそ上述のような〈シェア〉についてのメッセージを含意している。途中、哲学者である國分功一郎や千葉雅也らへのインタビューあり、青井哲人や西田亮介の論考を挟み、大局的には、近代の「空間」への批判的考察から自説の「エレメント主義」へと論を進めている。

そして最後は、多様なかたちで本書に登場する10人ほどの建築家のうち、1980年代生まれの若手で、シェアの思考と実践の真っ直中にある4人との座談会で締めくくられている。門脇耕三のシェアに関する思索のプロセスを生そのままに一冊にまとめた本となっている。本書自体がシェアの対象であり、いわば、オープンアクセスのクリエイティブコモンズといったところだろう。シェアというテーマにはふさわしい構成とも言えようが、次は、丸ごと一冊、門脇自身の一貫した思想を読みたいと思った。

（評者 岡部明子・東京大学大学院教授）